

善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。しかるを、世のひとつねにいわく、悪人なお往生す、いかにいわんや善人をや。この条、一旦そのいわれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆえは、自力作善のひとは、ひとえに他力をたのむころかけたるあいだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば、眞実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなるることあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もっとも往生の正因なり。よって善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おおせそうらいき。

第2組 清浄寺住職

波佐谷 宏昭

text by Hiroaki Hasatani

第三章 「往生の正因」

他力をたのみたてまつる悪人

「善人なおもて往生をとぐ。いわんや悪人をや」(善人でも往生を遂げる。ましてや、悪人はいうまでもないことである)という言葉は、世間の常識をひっくり返す言葉である。世間では「善は仏道の助けになり、悪は仏道の障げになる」というのが常識であり、「悪人なお往生す。いかにいわんや善人をや」(悪人が往生するのであれば、ましてや善人はいうまでもないことである)という言葉のほうが頷けるのであろう。しかし、阿弥陀仏の本願は、老少善悪をえらぶことなく、全ての人を救い遂げたいという願いであるから、善人も、悪人も分け隔てするということはない。阿弥陀仏が私達に求めているのは、ただ、本願に頷くこと、「他力をたのむころ」である。阿弥陀仏の本願を「この私を救わんが為の本願だ」と受け止める人は「自分は迷いを重ねて生きている。自分で自分を救うことは出来ない」という自覚を持つ人である。その自覚に近いところにいるのが「悪人の自覚」を持つ人である。宗祖が「悪人こそが往生する」とおっしゃられる理由は、「慈悲深い阿弥陀仏は、一番往生の難しい悪人から救う」からということではなく、「悪人と自覚するものこそ、私にかけられた願いとして本願を受け止める」からである。

自力作善のひと

私達の問題は、本願を我が身にかけられた願いとして頷くことが出来ない、本願の呼びかけに応じていけないということである。何故、本願に応じていけないのか。そのことを明らかにする言葉が「自力作善」である。宗祖は自力について「自力というは、わがみをたのみ、わがころをたのむ、わがちからを

はげみ、わがさまさまの善根をたのむひとなり。」(『一念多念文意』聖典五四一頁)とおっしゃっている。「わがみをたのみ、わがころをたのむ」という在り方は、阿弥陀仏の本願よりも、自分の力や、自分の心を頼りにする在り方である。「わがちからをはげみ、わがさまさまの善根をたのむひと」にとって称名念仏は、あまりにも頼りなく、信じ難い法である。自力作善の人は、自分に期待するが故に、「他力をたのむころ」が欠けるのである。本願を我が身にかけてくれた願いとして頷くことが出来ないのは、迷いを迷いと知らない、自分の生き様に痛みを持たないからである。

本願他力の仏道

宗祖が明らかにされた仏道は、「専ら本願の名号を称える」という仏道である。それは、「すべてのものを救いとげたい。我が名を称えよ」という阿弥陀仏の本願を、私にかけてくれた願いとして頷き、名号を受け止めることである。私達がすでに「南無阿弥陀仏」という言葉を知っているということは、如来が私のところに至り届いているということである。それは、私達の方から、如来に近づいていく為に修行をしたり、如来を探し求める必要がないということである。

また、仏の名号は「阿弥陀仏」であるが、そこに「南無阿弥陀仏」と「南無」が付いているということは、すでに「衆生が如来を信じ、如来に帰依する」ということも、如来が用意して下さっているということを示している。ゆえに、「専ら本願の名号を称える」という本願他力の仏道においては、人間が何かを付け足す必要は無い。自力を誇るのは妄念であることを知り、念仏申す。すなわち「他力をたのむ」ことだけが求められているのである。